

長崎北病院 伝言板 8月号

令和4年8月1日発行

8月。暑い。熱風が吹いている。ワシワシと蝉の声も暑さを倍化させます。芭蕉の句「閑(しず)かさや 岩にしみ入る 蝉の声」。この暑さに蝉の声。どこが「閑(しず)か」やねんと突っ込みたいところです。何かに没頭したり考え事をしたりすると周囲から隔離される状況でしょうか。その心境にはなれません「心頭滅却すれば火もまた涼し」。それ無理!



我慢の夏・雌伏の時

日本は「温帯地域」にあると習ったような気がします。「温帯は、安定した気候で四季の変化に富み、多くの動植物が生息する。農業に適しており古くから文明を育む」と記載されています。しかし、最近の雨の降り方のえげつなさ。しとしとではなく荒れ狂う。降る雨はスコール。毎年どこかで水害。熱中症多発。台風は大型化。まるで亜熱帯。絶対おかしい。温暖化している。個々の努力は微々たるものだが、せめて節電、節水。少しの我慢。

先週、久しぶりに学会出張で東京に行ってきました。コロナが急増していましたので行かないつもりでしたが、座長(司会)を依頼されていたので渋々出かけました。朝早い便で行ったのですが長崎空港から飛び立ちません。「羽田空港が混雑していて降りれないので離陸許可がでない」ということでした。滑走路でしばらく待機してやっと離陸。到着した羽田空港は子供づれや大きなトラックを持った人々で混雑していました。飛行機の便数も、人も大分戻ってきているようです。学会は「Web参加」も可能でしたが出席者もかなりたくさんいました。体調チェックシート(熱、咳の有無など記入)を提出し体温測定一回のみでした。街中も人の波。コロナの初期の頃と比べると、人の数、密度は増え、危機感は希薄に

なっているのを感じました。これだけ行動が活発化すれば感染が急増するのは当たり前でしょう。危険がいっぱい。取り敢えず撤退! マスクは外さず、必要最低限しかしゃべらず、会食どころか食事もせず、東京滞在5時間で日帰り、トンボ帰りです。



病院や施設では感染防御に奔走し、戦いが続いています。感染や濃厚接触者となって働けない職員が続出。残った職員で必死に医療を守っています。コロナと対峙する緊張感、先が見えないストレスの中での仕事が続きます。世の中の一部で広がる「大丈夫だろう感」と病院に求められる「安全の死守」に大きな差があるような気がします。現在 コロナは感染法上は2類相当の「新型インフルエンザ等感染症」に指定されています。感染すると入院を指示されたり、保健所の調査への協力を求められたりします。緊急事態宣言などで外出自粛など生活が制限されます。一方、国が検査や治療の費用を負担してくれます。この2類相当は厳しすぎるということで5類相当に引き下げようという話があります。インフルエンザのような扱いになります。規制はなく自由になりますが、現状の把握もできなくなり自己責任となります。検査、治療費なども自己負担になるかもしれません。お金がかかりますので受診控えが起きる懸念があります。医療では、インフルエンザはタミフルのような治療薬・予防薬など戦う手段があります。ワクチンも年に一回で3000円前後です。一方、コロナは予防薬はなく、治療薬も確立していません。現在のオミクロン株は重症化は少ないですが、今後 初期の頃のような重症化する強毒株に変異する可能性は常にあります。ワクチンも現在4回目ですが まだ続きます。現在保健所を含めて、手間やお金など行政の負担は大変な状況が続いています。病院も 5類相当になれば隔離も個人防護具も報告義務も必要なくなります。インフルエンザ並みになれば楽と思うのはよくわかりますが、人間楽すればそこから苦難の道に戻ることは容易ではありません。苦しくともまだ5類相当は時期尚早のような気がします。我慢の夏・雌伏の時。(A.S.)

